
ダサイ閃光

佳人薄命

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダサイ閃光

【Nコード】

N4790S

【作者名】

佳人薄命

【あらすじ】

目覚めた時は、分からぬ巨大な木の前に立っていた。

何かいっぱい疑問が生ずる。疑問が生ずる。疑問が・・・生ずる・・・の。

ときどきする。全身がびりびりする変な気分。

我知らずこなたはこなたも分からぬ所で走ってしまった。

こなたはプロローグからゼニスだ！（前書き）

日本語を勉強しています。 気まずい部分はすぐ指摘してください。

R15、残酷な描写ありは念のために入れました。

こなたはプロローグからゼニスだ！

「骨はうまく付いたんです。念のため、三日だけもつとくるんでから解きましょう。」

女医がモニターを見ながら言うことを聞いて首をコクリした。長いボールペンでモニターをあちこち示して言うけどよく分からぬ。ママも同じくで分からぬようだけど分けるというようにうなずいた。

「右側の膝は大丈夫だが左側の膝は折れながら脱臼して筋肉が破れたから、解いた後にも一ヶ月や2ヶ月位もつと入院して理学療法を受けて、退院の後にも何ヶ月位は通院治療なさらなければならぬんです。」

疲れる顔色で元氣なく説明に元氣なく首を縦にふる。ポニーテールの髪はがさがさするしアホ毛が元氣なくゆらゆらして変な位に疲れたように見える。夜を明かしたのか？

あれこれ説明が終わって看護婦が門を開いてくれる。目礼しては車寄子を回してママと一緒に出た。

「はあ、ついに解くだな。」

長かった。ギプスとベッドと車寄子に身を委ねた時間がいつの間にか一ヶ月とも半。それなりに好きな本を読むとかゲームをすることが時間をつぶすことができたがそれでも退屈なのは仕方なかったし、おまけに病院のご飯は冗談でもおいしくなかった。消燈は早くて誰か手伝ってくれなければトイレも行けぬ息苦しい生活に友達と言うものなどは物臭いと来ぬで見舞いは先生だけいたわしい回！はっ！全部絶交だ！友達が何か！こなたは本と結婚する！M a r r y m

e book!

とまれ！すべて終りだ。ギプスを解いて理学療法さえすれば自由だ！身も氣持ちもゼニスだ！

「元気なのは良いことだな！終われば運動でもしようかな　　うむ、Triathlon?」

「すっかり癒えるとしろよ。」

車寄子を押ししてママが投げるように言った。

「Thai boxing? Taekwondo?」

支柱に上げた足は差し置いたまま手だけあちこち動いて格好勢だけ取りながらとつとつと音を出してみる。じつといるよと低く言うてはため息を吐くママ。

「学院に通つたら発音だけあがりになったの、会話は全然だめなの。」

「Oxford式の英語ですよ」

「厚かましいもの。学院で変なことだけ学んだの。変なマンガ見ているし。」

舌打ちをするママ。Oh、Mother! 娘のHeartがSo painfulすることが見えないんですか？そしてなによりも・

「マンガじゃないです！Comics or Graphic novel!」

「コミックスなのかコミックなのかわかったものじゃない!」

「そんな!流石—Super Villain! こなたの宿敵!」

ママはぼかんと頭を殴る。動くことができぬ患者を殴るなんて、流石Super Villainらしい！血も涙もなく助けると哀願する子供も二三回ずつ殺すようだ。残忍だ。冷情だ。人でもないだ。

そんな思ったの中にもう一発当たった。どうして殴るのかと問うたら何か殴りたくなったそうだ。まさか読心術ちしんじゆつみたいなSuper powerがあるのか！

痛い頭を擦りながら車寄子に掛けたコートで本一冊を取り出した。

「また読むの？」

「違う本ですよ。」

英語の文章の下に男が一人描かれた地味に見える本にママが責めつけた。確かに近來グラフィックノベルやコミックスをたくさん読むとはしたけど、これは必ず読まなければならないから仕方ない。

本を開いたら多少、いや余程古い感じの絵が見えた。やや嫌いな位に画風が見慣れぬ。マンガに比べてこちらの画風がだいぶ違うが、これはそんな位の水準でぬという感じ。何か私が描くのがもつとよさそうな絵、だけど実際に私が描けばこれより劣るはずだ。

絵はやや変だがそれでもかなり悩んで買った本だから何とか読むだ。

『The golden age flash!』

DCコミックスとMarvelコミックスを一緒にしてこなたが最高に好きな人物の首位を争うフラッシュ、その中でも愛する初代フラッシュだったゼイスン・ピーター・ゲリック《Jason・Peter・Garrick》のコミックスを再版したのだ。ゴールデンエージのフラッシュであるほど当然その時代、1940年代

の感じがぶんぶんと漂うのは仕方ない。

漫画を見るのではなく小説を読む感じで読めば良い！と思ったら少し楽になった。小説でも構成がちょっとまずいようだけど。

羽付いた鐵帽、赤いシャツに勢いよく落ちる黄色い雷、四角形バツクルのついたベルトと青いパンツ、おまけにシャツはパンツ中へ。率直に、いや葉っ切り言ったださいだ。

『だけどそのダサイ格好が素敵！』

こなた、女として終りかも？こんなダサイこと好きで・・・、いやその前にこの年の女の子がこんなもの見ようか？ても面白いのだ。中学校1年生の時に外国人の前で気が引けるのを見たママが英語を学べばよくなるかと思っただけで英語学院に通ったし、そこで会った英語先生が貸してくれたコミックスを見ながら始めた愛は映画で出たように有名なことだけ搜してみる式で始めたが、幾何も無くて推薦を受けや搜しながら燃え立ったし、結局はこの年配の女の子中では稀にアメリカンコミックスマニアがなってしまった。

ある日ふと見回したマイルーム・・・中学校1年生までは適当に人形とか額とか置いておいた机には七か八個ほどの胸像フィギュアが、ママが掛け軸・ママが書いた・を無理矢理にかけておいた壁にはフラッシュとパワーガールのプリントが、ジャンル問わず適当に面白い本をいい加減においた本棚には半で分けてDCとMarvelのラベルが、ラップトップの壁紙も雪景からシー・ハルクに・・・アクションフィギュアやPVCも幾つある・・・

後で恋人みたいなこと生じた時マイルーム見てしまえばこなた死ぬかも。女の子趣味ではない・・・ても面白い！

「と・・・ところで、どうして外に出るんですか、ママ？」

「散歩したい。」

本を見ながらかず考える間いつのまにかママは車寄子を押し
て病院外の休憩所に出てしまった。当然に車寄子に乗ったこなたも
ママに押されて外界の見物をするようになってしまった。おお、日
光が？！

「灰になつてしまう！」

首を下げながら頭をくるんで暫くをうおお、と音を出したが全
然ママが応じなくて首を上げて見たらいつのまにかママはベンチに
座ってタバコを吸っていた。タバコ吸いたければ一人で来て吸えば
良いのに何で強いてこなたまで連れて来たのか、という気がした。

清掃員おじさんがママの肩を叩く。おじさんは振り返るママを見
てどこを示して、指を従ったら『禁煙』と書いた木版がかかつてい
る。塵取りを突き出すおじさんを見て不満にタバコを消して塵取り
に入れたママはため息を吐きながら椅子で軸垂れた。

くすくす笑って見てからそつと本を閉じた。

考えて見ればもう春が近くなったが病院でほとんど一步も出な
かった。空を見ることが、散歩することもなかった。仮にも冬が終わ
って蛙が目を開くシーズンなのに何と言うひきこもりかな。おまけ
にアメリカンコミックスマニアまで付けて。

「はあ。」

こなたが病院の中で幾多の超人に魅入っていた中に空気はこんな
に暖かくなつたな。うむ、まだ冷ややかではあるが確実に他の感じ
だな。

やっぱり身が癒えれば運動をしたい。今まではインドアやら何や
らしてさっぱり屋外を出なかったが、何かこんな空気の味が違うの
をもっと感じたい気持ち。健康の為とかこんな楽しみの為とか運動
をしなければならぬ。陸上みたいなことも良くて護身術して武術

みたいなこともいいかな。

そんな考えをしてあくびをする。大きなあくびをしたら涙がくすぶる。

「ふわああ・・・あ？」

もう一度あくびをした中に病院の3層の窓が開かれるのが見えた。看護婦が上体を差し伸ばしながら窓を開くことは病院でそんなに珍しい事でもなかったが、問題は窓を開きながら身に擦れたのか植木鉢が落ちたというのだ。そしてすぐ下には、先ほどママに注意を与えた清掃員おじさんがいた。

「危ない！！」

3層の看護婦がすぐなるがおじさんは聞けないように掃除を続ける。これ危ないっ！

周りには助けしてくれる人も居ぬ。それさえも近いママはタバコを吸うなくてノックアウト、近くに他人は全然ない。こなたを除けば。

『こなた、だけか！』

車寄子の車輪に手を出した。1秒もならぬ時間に植木鉢はほとんど半以上落ちてしまったし、こなたはおじさんに触れようとすればまだしばらくだ。最大にスピードを出しているけどやっぱり、無理だ。

『もつと早くねばならないのに・・・』

もう植木鉢はおじさんの頭にあたれそうだったし、こなたは車寄子の車輪で手を下げた。やっぱり無理だった。・・・無理か？

車寄子の車輪をしつかり握り締める。

『可能、だろう！』

急に全身が煮え上がる気がした。いやそれよりは心臓が激しく鼓動して血が身の隅々まで爆走する感じだろうか？形容することは難しいが少なくとも、可能だと、今なら何とかなるつもりという気がする。

いや・・・

「届くだ！」

植木鉢はいつのまにか止めたように見えて車輪は音もなしにむちやくちやに転がる。世の中が真つ黄色くて真つ赤な色で染まる感じがする。電流が流れるような奇妙な色彩の中で何だと言えない高揚感に包まれてとてもゆっくりおじさんに動いた。この感じをどんなに表現するか、この妙なことを何と言ってよいか、よく分からぬけどはつきりしたことは、おじさんを求めることができるというのだ。

「あ。」

植木鉢がそつと動くのを見てそのときになってまだおじさんを求めなかったことを気づきそつと前進して固い足で押した。予想よりもつと易しくおじさんが押し出されて、安心の息を吐き出した。そして、頭で鈍重な音が聞こえた。

「・・・いたつ。」

目を開いた時変な位に高揚感がした。変な位に気持ちが愉快だった。これがまさにゼニスだというのか？

手を見る。大きくない手が見える。腕を見る。タイトな真っ赤なシャツが腕をくるんでいる。胸部を見る。丘を成した胸に黄色い雷が勢いよく落ちる。足を見る。青いパンツと羽付いた赤いブーツがこなたを迎える。頭で感じられる少しの重さをさぐっていたら何か鐵帽みたいのが頭に載っかる。

・・・こなたはなんでこんな格好だか？

壁に手を出してたじたじ立ち上がっている途中ふつと壁が何か変なを感じた。これは壁ではなく・・・木？

こなたが手を出したのは一本の木だった。ただ壁と間違えるほどにすごい大きさでめちゃくちゃに育った木だった。千年はひらりと過ぎたと思われる巨大きわまりない木にちよつと我を忘れた。千年位に表現することができるのか、この木。

木をくるくる回りながら見たらもつとすごかった。ただ木一つを回るのにしばらく歩まなければならなくて、本物の木の当たるのか疑心になる。どこか門があっても変ではないようであちこち触って見るがただに木であるように反応がない。

「はあ・・・？」

なんと・・・？なんとこんな格好で名前も分からぬ巨大な木の前に立っているのか？

何かいっぱい疑問が生ずる。疑問が生ずる。疑問が・・・生ずる・・・のに。

「は・・・」

空を眺める。

「は、ははは・・・はははは。」

どきどきする。全身がびりびりする変な気分。

「はっ、ははっ！たのしい！」

我知らずこなたはこなたも分からぬ所で走ってしまった。

こなたはプロローグからゼニスだ！（後書き）

こんにちは、長生きする佳人薄命です。

まだ日本語を勉強の中なのに多くの人をただで先生するつもりでこんなを書いて申し訳ありません。読むのによほど手数があつたで思います。申し訳ないだけです。

ネタに対してどうしても分からぬ方が多いと思って短い説明を添付するようにします。

この文から出たフラッシュはグラフィックノーブル系のツー・トップ中の一つのDCコミックスの超人で「DCで一番早い超人」です。物理的な制限から脱して理論的には速度の限界がない力であり空間であるスピードポスを持ったスピードスターの中で一つとしてフラッシュによって違うが基本に音速を越して光束に至るとか光より早いです。

フラッシュが持ったスピードポスはフラッシュのようなスピードスターの根源で 物理的な制限を脱して早く動くことができるようにすること外にも保護幕を形成するとか治癒力を向上させたりします。時間移動や平行宇宙間移動も可能です。しかし自分の限界以上に速度を出していちじょうの光、エネルギーになってしまします。

超高速移動、超高速治癒力、時間移動・・・チート？チートですね。どうも宇宙を見くびった存在と争った超人だから仕方ないんですか。

このままにしておくとはほどチートになるはずだから相当部分に制限を加えるつもりです。

1話 - こなたの活躍がない

むちゃくちゃよ・・・遅刻じゃないの！

「あ、もうっ！」

あのガキのためなの！あのガキさえなければこんなに急に食べていなくて走る必要なかったのではないのよ！ネギ坊主が来てからできる事が一つもないわ！うぎゃ！

「おはようございます！」

「遅れたな、あすなーあ」

門を開くとあたしをむかえる音が聞こえる。一つは門に掛かる鈴のちりんちりんする音、一つは・・・

「おはよー、フラッシュ。バイトは？」

椅子に座って足を振る彼女だ。

「うむ、せんーこくすべて回ったな」

妙な言いぐさであたしをむかえるこの子はフラッシュ。少し前に事情でバイトをやめた大山わりにバイトをするようになった新米だ。初めにはかなりびっくりした。・・・変な鐵帽をかぶるとかその変な言いぐさとか少し高くはあるけど椅子で足が触れなくて飛びおる背なのにあたしより年上とか配達がすごく早いとかも、まあ、もちろんびっくりしたりしたが・・・変な身なりをする人はクラスに珍しくないし、変な言いぐさする人もちよつとあるし、格好と年

を全然マッチすることができない人も少なくないうえ身体能力がすごい人も多くのクラスだから・・・考えて見たら変なクラスだね・・・

とにかく、一番びっくりしたことは、初めに見た時驚愕するしかなかったことはその・・・フラッシュのその、ダサイ格好。

その羽みたいをつけた鐵帽それなりに個性というで何とかスルーでしたが黄色いいなずまが描かれた真つ赤ですごくタイトなシャツにどうしてか青いパンツ、靴は赤いブーツ・・・そのうえに直四角形のむじバツクルが付いたベルトまで。カールしたおかつぱに可愛くて動感にあふれる顔なのに信号灯の配色、それにほぼ原色！そ、そ、それに！

「どうかシャツちよつとパンツに入れないで！」

その真つ赤なシャツをその青いパンツに入れるというのが、とても堪えることができないわ！ダサくて見る人が死んじゃうようなのよ！

とても堪えることができてなくて服をぐいと取ってパンツで抜き取ってしまった。いまどきはおじさんもそうに着ないのに。

「なんでそうだのか？ふむふむ」

抜き取った裾をまたパンツに入れながらにこにこ笑う。・・・顔はこんなに可愛いのにダサイことはもうおじさんを超越したの。

一息を吐き出してあたしが配達すべき新聞を捜すが変に何もなし、おじさんとおばさんも見えなかった。まさかお二人も遅刻・・・であるはずがないでしょうね、フラッシュがもう配達を終わらせたの見れば・・・

「おじさんとおばさんはどこに行ったの？」

「うむ、仕事があると言って出ながらみせばんをたのまれた」

「あたしの新聞は？」

「こなたがすべて終わらせた」

「あ・・・ごめんね」

「大丈夫、大丈夫。みせばんに退屈でちよつと出たついでにしたのだ」

・・・みせばんして言ったのに出てしまったらどうすると言うの？

「疲れたように見える。休んで行くのがどうだろうか？」

「あ、そうするかな？」

「中学生ではないか。休みせよ」

とても、数時間の後に学園も行かなければならないし、もうフラッシュが事も終わらせたからちよつと休んでも、いい、でしょう？
このごろはネギのためにかなりくたびれたりしたし、この位は休んでもいいでしょうね。

フラッシュの前に座ってマフラーを解いてばたつと伏せた。ふんふんとフラッシュの鼻歌が聞こえる。フラッシュはいつも楽しいよ
うだね。

「だって、あすなーあ、こなたを姉さんと呼んでくれと言わなかったか？」

無理。そんなの無理。この人・・・姉さんと呼ぶことができないわ、とても。あたしより幼く見えて行動も可愛いし、たまには頭を撫でたい。動物のような、それも可愛い犬や猫みたいな感じなので絶対お姉さんと呼ぶことができない。あやしい文語体みたいなもの使っけど、むしろこなた　だな　するのがもつと子供みたいだし、それに・・・あのダサイことをお姉さんと呼ばばあたしもダサくな

るようもつと呼ぶことができない。

「シャツをパンツで抜いてあたしをあすなーあと呼ばなければ考えて見るわ」

「うむ、特別に呼名を許可するぞ」

「どうしてそのように服を入れて置くの。抜いてはいけないわ？」

信号灯の服や鐵帽は仕方ないんだけどどうかそのシャツをパンツに入れることだけはやめてくれよ！

「駄目だ！これはこなたである！」

「何の言うのよ！」

「これを入れなければフラッシュじゃない！ただ信号灯であるだけだ！」

信号灯の自覚ある？！分かれば着替えなさい！

「飲みせよ」

「え？ありがと」

いつ持ってきたのか、フラッシュがあたたかいカンジュースを渡す。・・・ってこれ炭酸？フラッシュが持っているのは、カン緑茶。

「かえる！」

「うむ、残念だな」

なんで炭酸飲料を温めたの。自分も飲まないことを見たら好みでもないようだ。ただにいたずらをするつもりだったのか。・・・なんか兎戯みたいなはずらするね。

あたたかい緑茶を飲んだら疲れた身が少し取れるようだ。

「うむ、それでえ、このごろはどうなのか？ちびっこ先生が来てあれこれ困ると言ったら」

「まあ・・・」

フラッシュはほんとうに早くて自分の区域は忽ち配ってしまつてあたしと一緒に配りながらそんなこんな話をしたりした。初めにはあたしの新聞も時間が残ると配ってしまおうと思つたが、あたしの分だから私が配ると言つたらただ一緒に走りながら話を交わした。あたしの配達する時間は朝と言うよりは夜明け、夏ではなければまだ暗い時。ひとりはやつぱり、ちよつと恐い。だがフラッシュと一緒に通いながら対話するから恐くないし、より少なくなつかれるし・・・いいわ。

いまだき主に言うことは、ネギに対する苦情。もちろん魔法の話はおいて。

「お風呂をいやなんて、本当に・・・においもして汚くてお風呂に入れてくれるのに、いいんちよ達がいきなり入つて来たの。まったく・・・」

「大変であつたな。だけど１０歳でも男の子を洗われたか？」

「数えて１０歳、だから９歳よ。ホントにガキなんだからね・・・それに一人で洗いなさいと言えばちゃんと洗わなかつたでしょ」

「信頼を失つた先生だな」

「もう新学期で正式な先生になったから、もっとしっかりしてほしいの」

フラッシュはにこにこしながらあたしの話を聞く。おもしろいか？

「あたしと話すことおもしろいの？あたし、苦情ばかりするけど」

「うむ、そなたは分からないかも知れぬが、あすなあが聞かせる話はExcitingとThrillerがあふれる。たまには妬ましいもする」

「話だけ聞くからそうなのよ」

べえ、と舌を出す。自分があえばあんな話せないの。

「そして・・・」

「失礼します」

続いて苦情を言おうとするのに、急にドアがあいた。客・・・？
いやこんな時間に？お巡りさんなのか、と思うには声が幼くて親し
・
・

「え、ネギ？」

「あ！アスナさん」

ネギがどんなにここに？バイトするところ分かったのか？・・・
ってそれよりここには何で来たの？

一手に杖を持った妙に時代錯誤を犯す姿で現われたネギはフラッシュを見て首をこくりと下げる。

「おはようございます」

ふらりとフラッシュが椅子で飛びおりる。そしてネギを中心にぐるぐると回りながらにこにこ笑う。フラッシュに付いて頭を動かすネギがちよっと汗を流すようだ。そうしてみれば初めにあたしもそうだったのね。変な子と思ったのよ。

「うむ、おはよう。そなたがネギだな。こなたはフラッシュだ」

「あ、僕はネギ・スプリングフィールドです。二年A、いやいや三年A組をの担任です。英語を教えています」

あいさつを交わすふたつを見て頬を掻いた。こんなに見たらフラッシュ本当に小さいね。十歳のネギと別に差ない。もちろんフラッシュの方が大きくはあるけどこのかの位だか思っただのにもうちよつと小さいかな？150？？

「本当に聞いた通りに少年だな。すばらしいな、日本語もお上手で。UKから来たと？」

「はい。正確にはウェールズから来ました」

「ほう・・・Cymruか」

「カーケー？カ、カ、カ、カムリ？なにそれ？」

「Cardiffかな？」

「いいえ ただに山奥だったらたぶん分からないんです」

「Cardiff・・・いいな 少し前に行った時はなかなかいたのしかった」

「ちょっと、なんでスルー？」

「いつ行つたの？」

「Secret」

ネギが何か言い違ったのか考えているんじゃないの、無視するな。

「何で来たの、ネギ」

「え？ええ、早く起きたついでにアスナさんを手伝うかと思って・・・けどもう終わったんですか？」

「そうだ、休む時間である。徒労だな」
「あう、そんな・・・」

がつくりするネギ。フラッシュは呵呵呵呵と笑いながら背中をぺたぺたと叩く。いたずらにこうつ笑い声ね。もうちよつと外形に当たるようにはできないわよ？ま、まあ、あたしが言うものじゃないんだけど、口調でもちよつと・・・

すぐ復活したネギと微妙に意気投合するフラッシュを見ていてから時計を見た。うん、適当な時間だね。

「もう学園へ行く準備しなければならないわよ。フラッシュ、代わりに配達してくれたのと緑茶ありがと。後で奢るわ。」

「1000円以上？」

「だめ！」

そんなお金あるか！最大500円！

ばさばさにマフラを巻きながら起きてネギをひっぱる。くびすじをつかんで軽くひっぱりながら門を開いてフラッシュに手を振った。

「またね！」

「あしたは遅刻すれば駄目だろう？」

「当然ね、あしたは覚悟しろよ」

「フラッシュさん、また・・・ちよつと待ってください、杖が、あわわ」

「あんたが持つて来なさい」

「放してやると・・・え、杖！」

「うむ、ネギを与えれば杖を返す」

「あうう・・・返してください！」

「おとなしく？白之身を進上せよ！」

「なんのことをいうのよ。」

杖を奪って入って寮に帰って学園へ行く準備をした。学園は遅刻しないようだね。

「「「「3年！A組！！」」」」

「「「「ネギ先生——っ？」」」」

飛びあがる生徒たち。始業の初日からテンション高い！

「えと・・・改めまして3年A組担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの一年間よろしくお願いします」

「「「「は——い！よろしく——？」」」」

顔をこっさり赤くしてあいさつするネギとまた飛びあがる生徒たち。だからあんまりテンション高い！

まったく・・・あたしは休んで来てもまだちょつと疲れるのに、なんでそんなにぴちぴちとしているのかしら。まあ、あたしもクラスに一役する人だけど妙に今日は沈着になる。なんか頭の中であれこれ説明するようで・・・口調も何かちょつとぎこちなくなった。

コンコン

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3—Aのみんなもすぐ準備してくださいね」

「あ、そうでした、ここですか！？わかりました、しずな先生」

こつそり現われたしずな先生の言葉にふいを突かれたように妙にあたふたするネギを見てあちこちで笑いが吹き出る。まあ、ほかの考えでもしたかな。

「で、では皆さん身体測定ですので・・・えと、あのつ、今すぐ脱いで準備してください」

あ、やつちゃった。

「「ネギ先生のエッチ　ッ？」「」
「うわ　ん、まちがえました」

まったく、ぜんぜん学習しない力キだから。ため息をつきながら服を脱ぐ。

「あれ——？今日まきちゃんは？」

「・・・さあ？」

「まき絵は今日身体測定アルからズル休みしたと違うか？」

服を脱ぎながらあちこちで騒ぐ音が聞こえる。桜子のいたずらで委員長の体重が一倍半になるとかどたばたうるさいつ。

「ねえねえ、ところでさ最近寮ではやってる・・・あのウワサどう思う？」

「え・・・なによソレ柿崎」

柿崎がふとひきだす話題に問い返した。ウワサ？またネギか？なんか分かるというように美空が話を受ける。

「ああ、あの桜通りの吸血鬼ね」

「それともう一つのね・・・」

「え——何！？何ソレ——！？」

「何の話や？」

桜子やこのかとうとう多数が柿崎に質問攻めするで柿崎は荒てたようだ。あたしがあんまり周りに関心がなかったかな、と思ったのに別に有名なウワサではないのか？

「知らないの？一つはこのごろかなり有名になったし、一つはしばらく前からある噂なのに・・・このごろ方は、この周辺でたまに危ないことができればいきなり出てくる変な人があつたそうなの。何かダサい服を着ているというのに・・・」

・・・なんか不安。

「鐵帽を使って赤いシャツに青いパンツ着るでは・・・」

まさか。

「シャツをパンツに入れるというんだって！」

「ぶっ」

「「「きゃははは——！」「」」

やっぱりか！何をするの、フラッシュ！恥ずかしいから、服、抜いて！恥ずかしい！フラッシュは恥ずかしくないの！？

「何か絡み付くならず者を叩き伏せるとか猫を助けるとかするよ
うなの」

「変な良い人ね」

変な、良い人・・・そうね。

「あ、その人見たの」

桜子がぽんと手のひらを打って話す。

「コンビニから出るのに変な人々がこえを掛けて避けようと思ったのに、いきなりその人が出てくる」

「どんな感じ？」

「えーと、私より小さかった。そして女の子」

「ええい」

あちこちで惜しいように音が流れた。いくらハンサムな男でもそんなダサい格好なら嫌い。

「変な人々が「何だてめえ」と言うから、このようにして・・・」

両手を腰に付けて自信満々たる顔をした桜子が叫んだ。

「こなたは、フラッシュだ！」

フラッシュ！やめなさい！ダサいで恥ずかしくて死ぬようなのよ！

「そして変な人々をすべて叩き伏せたわ」

「おお」

「見たいアルネ」

今更驚いた。からだも小さくて力も強く見えないのに。まあ、く
—ふえもあるし、いいかね。

「カカカと笑って私が買ったポテチップ持って行ってしまったわ。
「御返しゲット!」と言いなから」

「だはっ、なによソレ」

フラッシュ!

そのご、残ったウワサ、桜通りの吸血鬼への話をした。すぐ吸血鬼の話で吸血生物チュパなんとかの話になってしまったけど、気になる。吸血鬼、かね。

「大変や——っ! まき絵が・・・まき絵が——」

「何!?!」

「まき絵がど——したの!?!」

「わあ　　!?!」

1話 - こなたの活躍がない（後書き）

遅れて申し訳ありません。 まあ、待つ人もいないが。
アスナの言いぐさはこんな感じですか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4790s/>

ダサイ閃光

2011年10月9日00時06分発行